

シリアルフラッシュROM対応のライタープログラムを追加する場合の説明 (ブートモード1/3用)

Rev1.30 2012/10/4
DEFバージョン11.00Aより
DEFバージョン12.10A変更
DEFバージョン12.20A変更

【対象CPU】

1. ROMレス品種が対象になります。(SH7262/4/6/7)

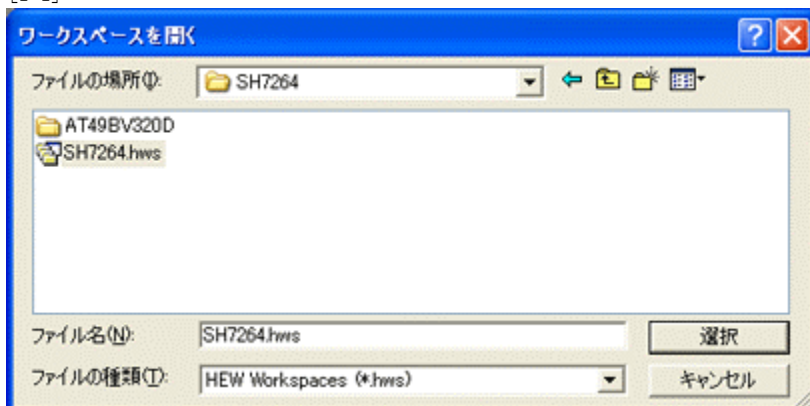
【機能】

1. サンプルで「AT25DF041A」の対応ソフトを用意してあります。(ルネサスCのみ対応)【SH7262/4】
2. サンプルで「SST25VF016B/M2P16」の対応ソフトを用意してあります。(ルネサスCのみ対応)【SH7266/7】
3. SH7262/4/6/7【RSP10】に接続されたシリアルフラッシュROMが対象になります。
4. HewにてFlashROMの品種追加が出来るよう対応する。
5. シリアルFlashROM仕様に合わせたセクターイレーズとバイト書き込みをプログラミングするだけで追加が可能になります。

【品種追加前の準備】

1. AH7000コントロールソフトのインストールDIRにあるワークスペースを開きます。(追加例)

[1-1]



<デフォルトディレクトリ>

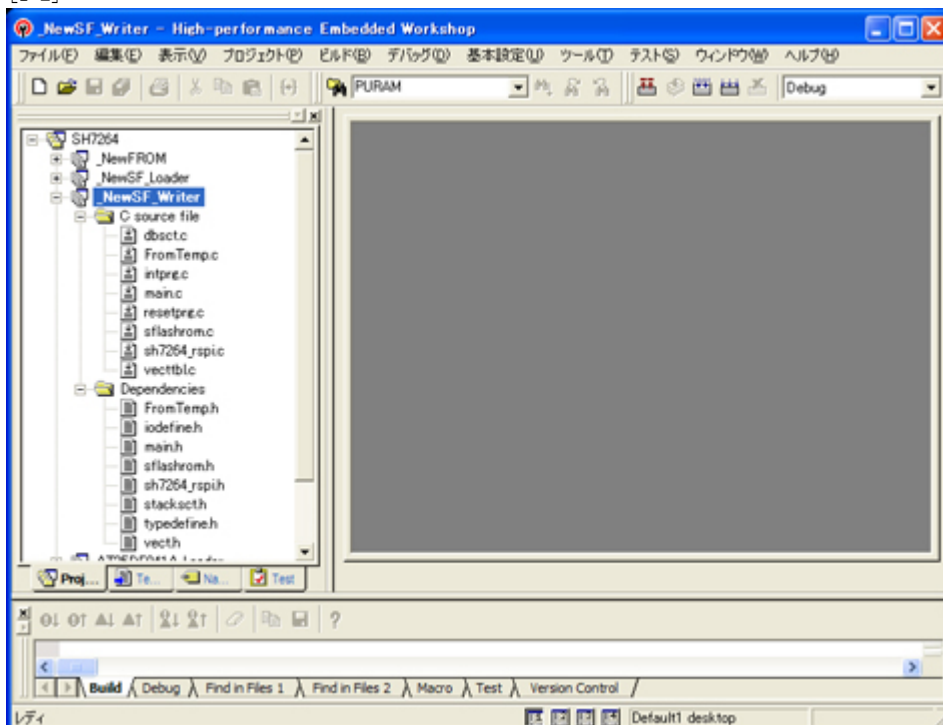
"c:\Program Files\Aone\DEF\rom-custom\SH7264"

<ワークスペース>

"SH7264.hws"

2. プロジェクト名「_NewSF_Writer」をアクティブプロジェクトに設定します。

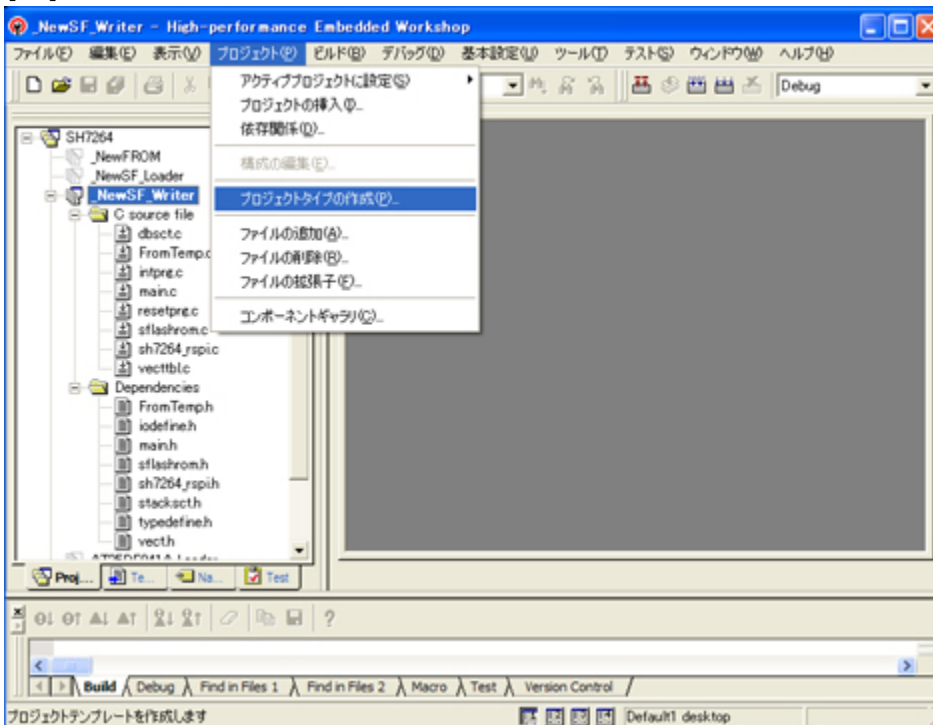
[1-2]



<_NewSF_Writer>をマウスクリックし、右クリックのポップアップメニューから選択します。

3. 「プロジェクトタイプの作成」をします。

[1-3]

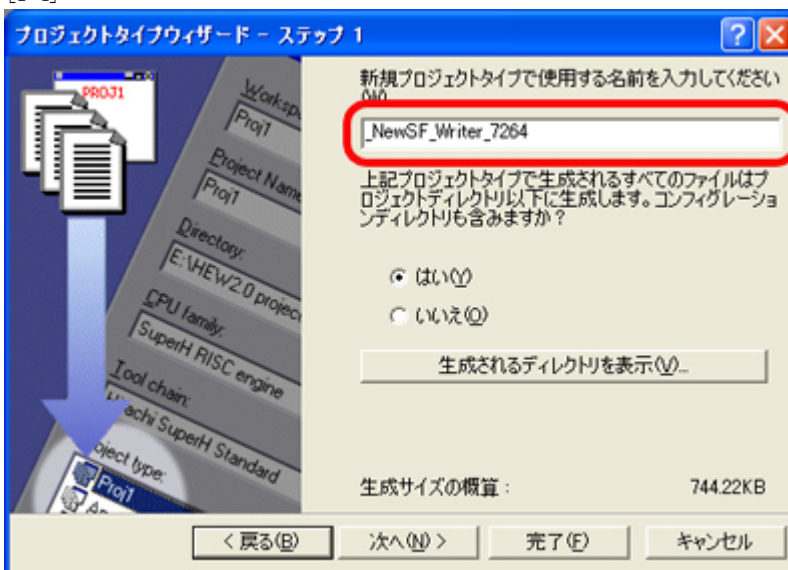


Hewメニュー

<プロジェクト>-<プロジェクトタイプの作成>をクリックします。

4. 新規プロジェクトタイプで使用する名前を指定します。

[1-4]

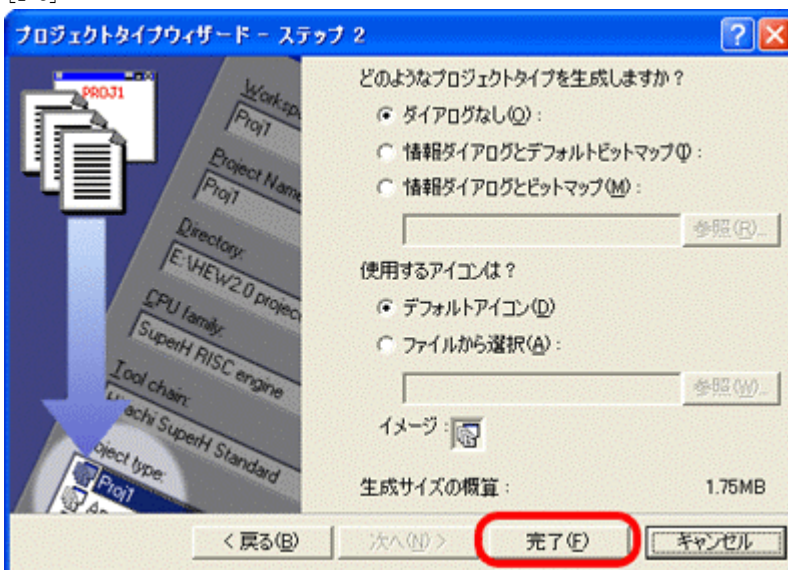


名前は、重複しないようにして下さい。

例として「NewSF_Writer_7264」としておきます。

<- 「次へ」をクリックします。

[1-5]



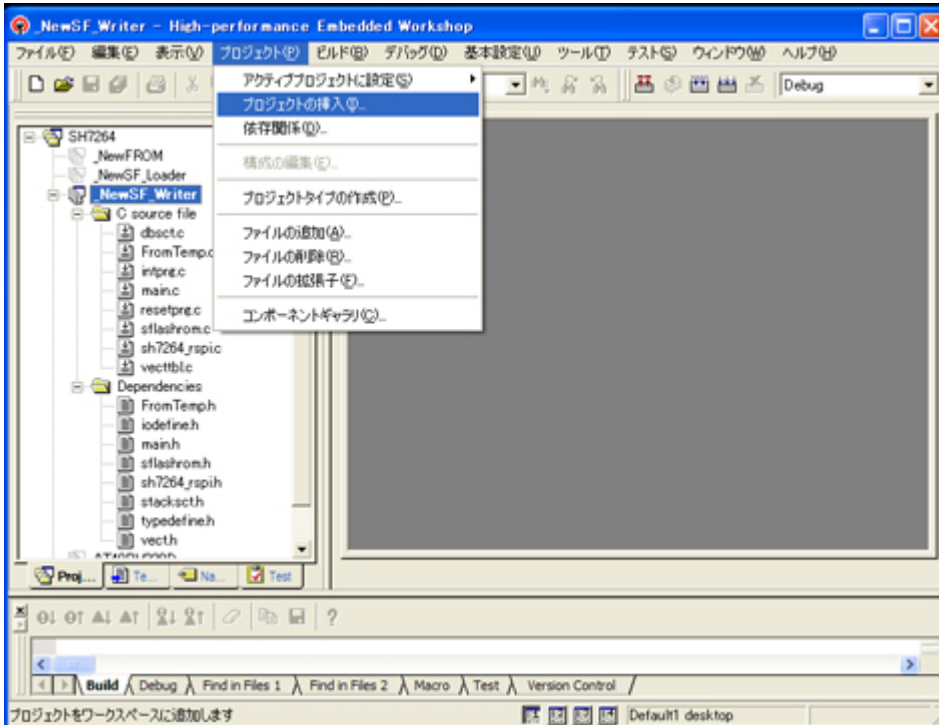
<-完了をクリックします。

この操作で「品種追加前の準備」は完了です。

【新規シリアルFlashROM用ライタの追加】

1. 新規シリアルFlashROM用ライタを追加するため、「プロジェクトの挿入」をします。

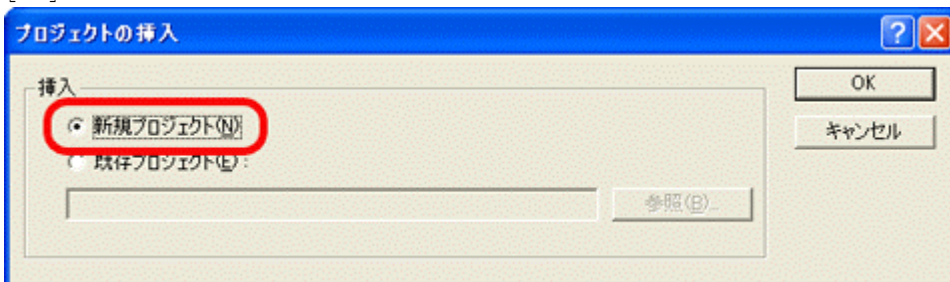
[2-1]



Hewメニュー

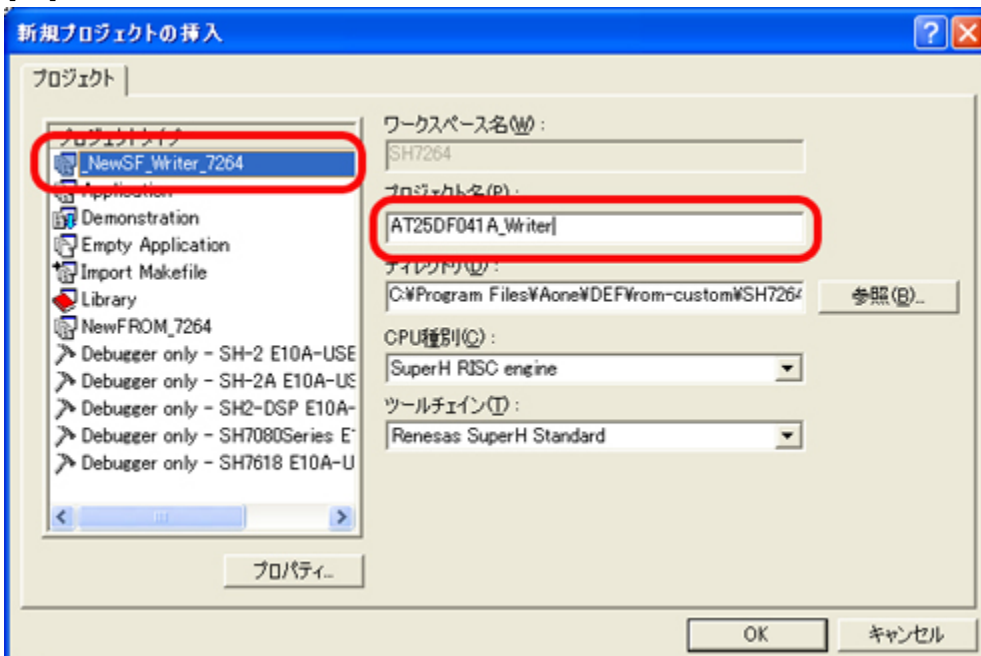
<プロジェクト>-<プロジェクトの挿入>をクリックします。

[2-2]



「新規プロジェクト」を指定して、「OK」をクリックします。

[2-3]

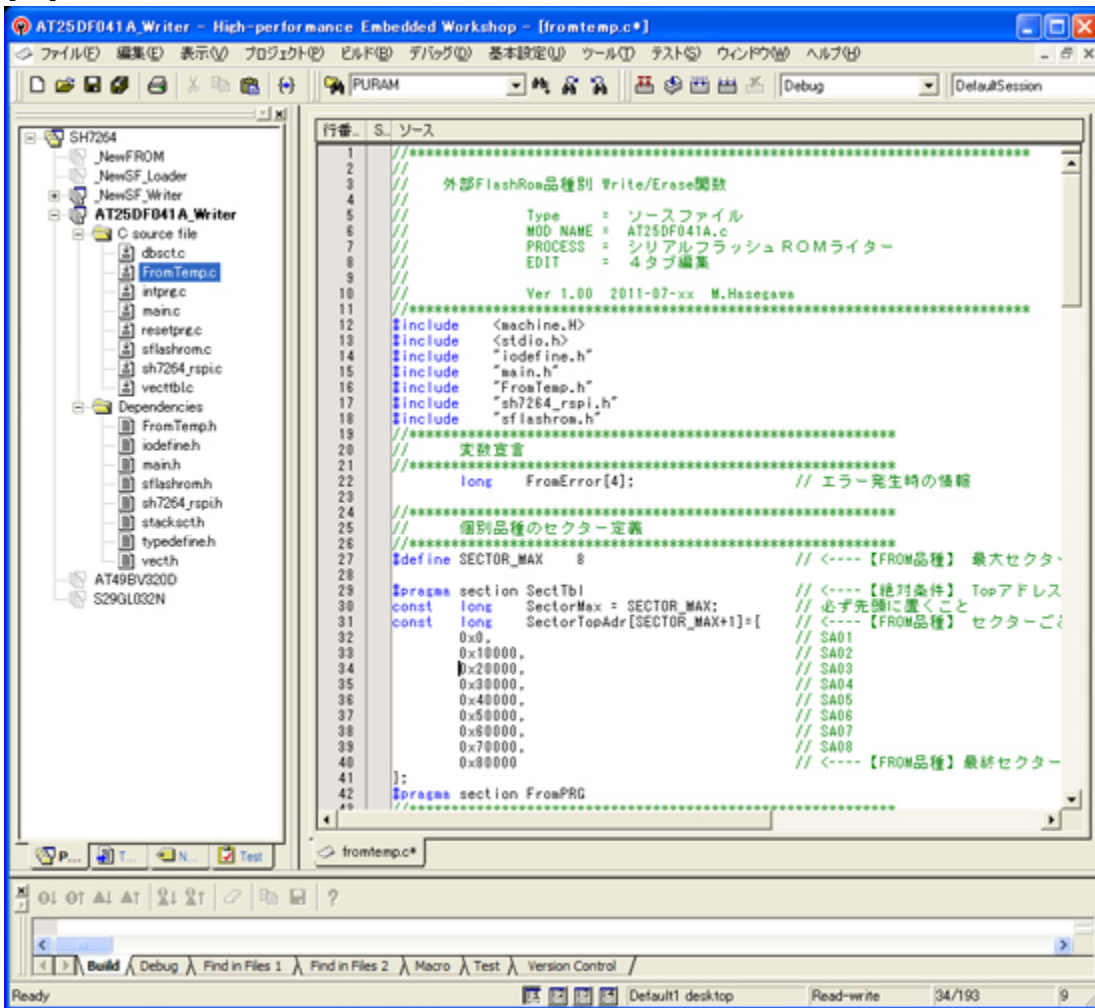


1) プロジェクトタイプに作成した「NewSF_Writer_7264」を指定します。

2) プロジェクト名を指定します。FlashROM名を追加した「AT25DF041A_Writer」にします。

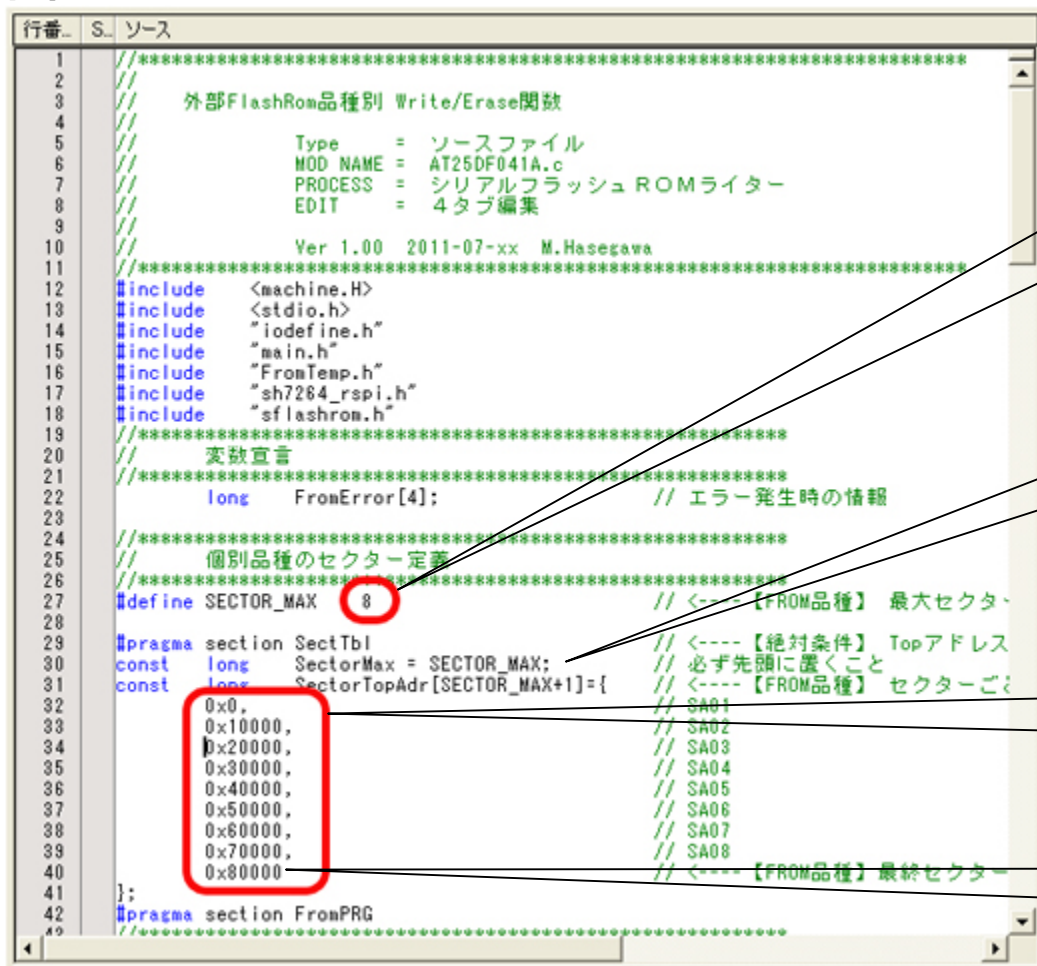
<- 「OK」をクリックします。

2. 新規シリアルFlashROM用ライタの定義および制御プログラムを作成します。
[2-4]



新規シリアルFlashROM用の定義および制御プログラムファイル「FromTemp.c」を開きます。

- 1) 「FromTemp.c」に新規シリアルFlashROMのセクター情報を定義します。
[2-5]



2) 「FromTemp.c」に新規シリアルFlashROMの「オープン」「クローズ」関数を作成します。
[2-6]

```

42  #pragma section FromPRG
43  //*****
44  //      FromOpen()
45  //      FlashRomアクセス時に初期化が必要な場合の手続き
46  //      不要な場合、プログラム記述しなくても良い
47  //      開始時に1回だけ呼ばれる
48  //      return()
49  //      OK == 正常終了
50  //      NG == 異常終了
51  //*****
52  int FromOpen(void)
53  {
54      IoInitRSPI0();           // RSPIの初期化
55      sFlashUnProtect();      // アンプロテクト
56
57      return(OK);
58  }
59  //*****
60  //      FromClose()
61  //      FlashRom書き込み処理が全て終了した場合に必要な手続き
62  //      不要な場合、プログラム記述しなくても良い
63  //      終了時に1回だけ呼ばれる
64  //      return()
65  //      OK == 正常終了
66  //      NG == 異常終了
67  //*****
68  int FromClose(void)
69  {
70      sFlashProtect();        // プロテクト
71
72      return(OK);
73  }
74  //*****

```

関数「FromOpen0」は、ターゲットRAMに、このプログラムがダウンロードされた時、最初に1回コール(Call)されます。
このプログラム例は、プロテクト解除(アンロック)しています。必要無い場合は、「return(Ok);」のみ記述します。
[IoInitRSPI00¥sh7264_rspi.c] RSPI0の初期化関数
[sFlashUnProtect0¥sflashrom.c] アンプロテクト関数

関数「FromClose0」は、フラッシュROMに全データ書き込み終了後の最後に1回コール(Call)されます。
このプログラム例は、プロテクト(ロック)しています。必要無い場合は、「return(Ok);」のみ記述します。
[sFlashProtect0¥sflashrom.c] プロテクト関数

3) 「FromTemp.c」に新規シリアルFlashROMの「セクターイレーズ」関数を作成します。
[2-7]

```

73  }
74  //*****
75  //      FromSectorEraseProc(char *cmd)
76  //      伝送フォーム(in)
77  //      cmd[0] == %
78  //      [1] == 0
79  //      [2] == CommandSize[2]以降[Sum]も含む
80  //      [3] == Command('D')
81  //      [4] == Sector(H) MAX(1024)
82  //      [5] == Sector(L)
83  //      [Sum] == [3]->[Sum-1]の加算
84  //      return()
85  //      OK == 正常終了
86  //      NG == 異常終了
87  //*****
88  int FromSectorEraseProc(char *cmd)
89  {
90      Ulong adr;           // セクターの先頭アドレス
91      short sector;
92      int stat;
93
94      sector = (cmd[4] << 8) & 0xff00;
95      sector |= cmd[5] & 0xff;
96      if (sector < SectorMax) {
97          adr = SectorTopAdr[sector];
98          sFlashSectorErase(adr);           // セクターイレーズ
99          stat = FullStatusCheck(adr, 'D');
100         if (stat == OK) return(OK);
101     }
102     return(NG);
103 }
104 //*****
105 //      FromWriteProc(char *cmd)

```

関数「FromSectorEraseProc(char *cmd)」には、セクターごとのイレーズプログラムを記述します。デバッガとの通信完了後、サムチェック正常の場合、この関数がコール(Call)されます。(サム異常時はコールされません)
<引数の仕様>
char cmd[];
cmd[0] == '%' // ヘッダー
cmd[1] == 0 // 予備
cmd[2] == 4 // コマンドサイズ cmd[3]->[Sum]までのサイズ
cmd[3] == 'D' // コマンド
cmd[4] == 0xn // 消去するセクター番号のH数 最大HIGH(1024)
cmd[5] == 0xn // 消去するセクター番号のL数 最大LOW(1024)
cmd[6] == 0xn // サム cmd[3]->[5]の加算値
<備考>
全イレーズ処理にしたい場合は、セクター番号ゼロ「0」のときのみ実施して、他のセクターの場合は、「return(Ok);」にすれば代用できます。
[sFlashSectorErase0¥sflashrom.c] セクターイレーズ関数

4) 「FromTemp.c」に新規シリアルFlashROMの「バイト（書き込み）」関数を作成します。
[2-8]

```

104 //*****
105 //      FromWriteProc(char *cmd)
106 //      送信フォーム(in)
107 //      cmd[0] == %
108 //      [1] == 0
109 //      [2] == CommandSize[2]以降[Sum]も含む
110 //      [3] == Command('W')
111 //      [4] == WriteAddress(HH)
112 //      [5] == WriteAddress(MH)
113 //      [6] == WriteAddress(ML)
114 //      [7] == WriteAddress(LL)
115 //      [8+0] == WriteData[0]
116 //      .
117 //      ==
118 //      [8+127] == WriteData[127] 固定 余分エリア(0xff
119 //      [Sum] == [8]->[Sum-1]の加算
120 //
121 //      return()
122 //      OK == 正常終了
123 //      NG == 異常終了
124 //*****
125 int FromWriteProc(char *cmd)
126 {
127     Ulong   adr; // 先頭アドレス
128     Uchar  *data;
129     Uchar  verf[BLOCK];
130     int    i;
131     int    stat;
132
133     adr = (((long)cmd[4] << 24) & 0xff000000) |
134           (((long)cmd[5] << 16) & 0x00ff0000) |
135           (((long)cmd[6] << 8) & 0x0000ff00) |
136           ((long)cmd[7] & 0x000000ff);
137
138     data = (Uchar *)&cmd[8]; // Data Adr set
139     sFlashByteProgram(adr,data,BLOCK); // 指定バイト数の書き
140     stat = FullStatusCheck(adr,'W');
141     if (stat == NG) return(NG);
142
143     sFlashByteRead(adr,verf,BLOCK); // ベリファイテスト
144     for(i = 0; i < BLOCK; i++){ // VerifyTest
145         if (verf[i] != data[i]) { // VerifyError
146             FromErrorSet((long)'R',adr,(long)data[i]);
147             return(NG);
148         }
149         ++adr;
150     }
151     return(OK);
152 }
153 //*****

```

関数「FromWriteProc(char *cmd)」には、128バイトごとの書き込みプログラムを記述します。デバッガから書き込みデータ 128バイト固定でデータを受信し完了後、サムチェック正常の場合、この関数がコール(Call)されます。(サム異常時はコールされません)

<引数の仕様>

```

char cmd[];
cmd[0] == '%' // ヘッダー
cmd[1] == 0 // 予備
cmd[2] == 134 // コマンドサイズ cmd[3]->[Sum]までのサイズ
cmd[3] == 'W' // コマンド
cmd[4] == 0xn // 書き込みアドレス(HH)
cmd[5] == 0xn // 書き込みアドレス(MH)
cmd[6] == 0xn // 書き込みアドレス(ML)
cmd[7] == 0xn // 書き込みアドレス(LL)
cmd[8] == 0xn // 書き込みデータ[0]
"
"
cmd[135] == 0xn // 書き込みデータ[127] 固定 余分エリアは(0xff)
cmd[136] == 0xn // サム cmd[3]->[135]の加算値

```

<備考>

このプログラム例は、128バイトの書き込み終了後、ベリファイテストも実施しています。

[sFlashByteProgram()¥sflashrom.c]バイト書き込み関数
[sFlashByteRead()¥sflashrom.c]バイト読み出し関数

5) 「FromTemp.c」に新規シリアルFlashROMの「フルステータスチェック」関数を作成します。
[2-9]

```

152 //*****
153 //      FullStatusCheck() Word Access
154 //      フルステータスチェックエラー発生時は、エラー情報
155 //      を[FromError]に残す
156 //      FromError[0] == command 'W' or 'D' or 'E' or '0' == Open
157 //      [1] == アクセスしたアドレス
158 //      [2] == FROM ステータス
159 //
160 //      return()
161 //      OK == 正常終了
162 //      NG == 異常終了
163 //*****
164 int FullStatusCheck(Ulong adr,char cmd)
165 {
166     Uchar stat;
167
168     FromErrorSet(0,0,0); // Error情報を消去
169     stat = sFlashReadStatus(); // Error発生
170     if (stat & EPE) {
171         FromErrorSet(cmd,adr,stat);
172         return(NG);
173     }
174     return(OK);
175 }
176 //*****

```

関数「FullStatusCheck(Ushort *adr,char cmd)」には、フラッシュROM特有のステータスチェックプログラムを記述します。この関数は、上記の作成関数からのみコール(Call)されます。よって、内部処理は自由に記述して下さい。

<引数の仕様>

```

Ushort adr; // 処理しているフラッシュROMのアドレス
char cmd; // 処理しているコマンド
//"O" = オープンコマンド
//"C" = クローズコマンド
//"D" = イレーズコマンド
//"W" = 書き込みコマンド
//"R" = ベリファイコマンド

```

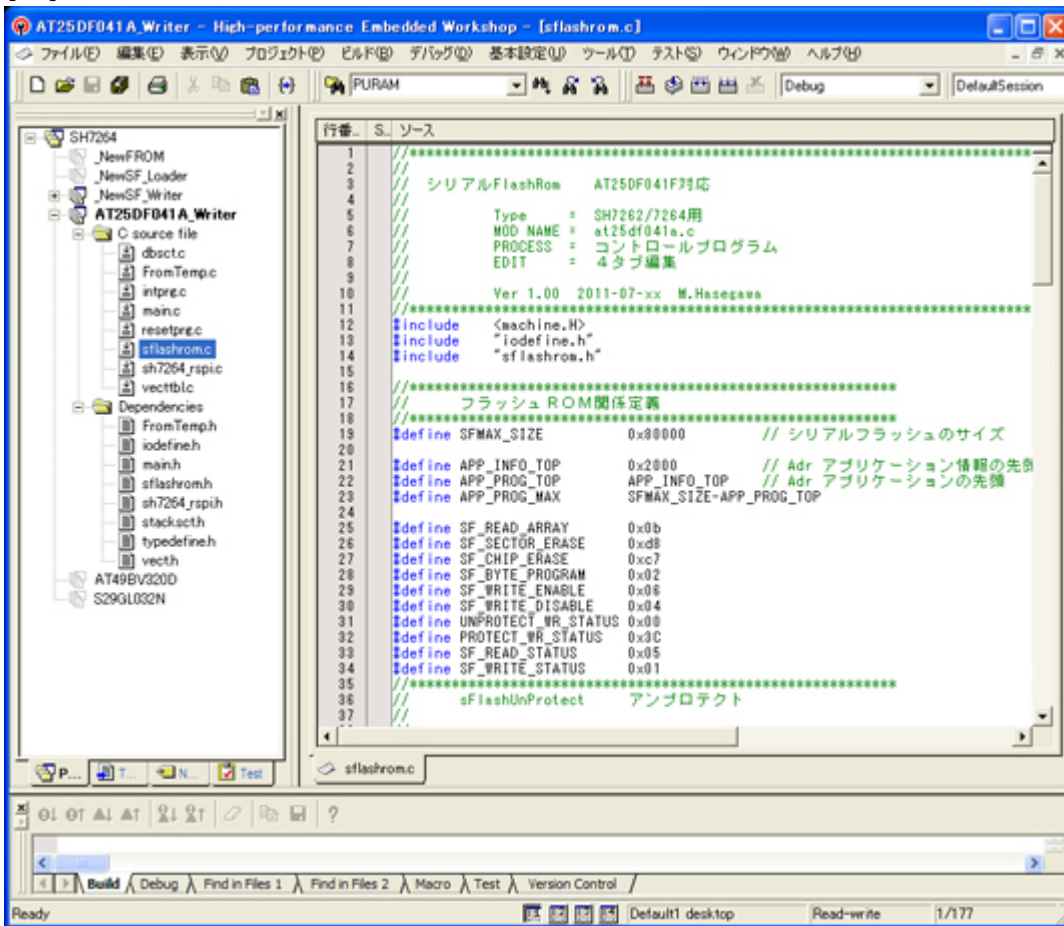
<備考>

関数「FromErrorSet(.)」は、関数デバッグ時のエラー情報を見るための一例としての関数です。仕様に関してはルールがありませんので、自由に作成して下さい。

[sFlashReadStatus()¥sflashrom.c]ステータスリード関数

3. 新規シリアルFlashROMに依存した定義およびコマンドプログラムを作成します。

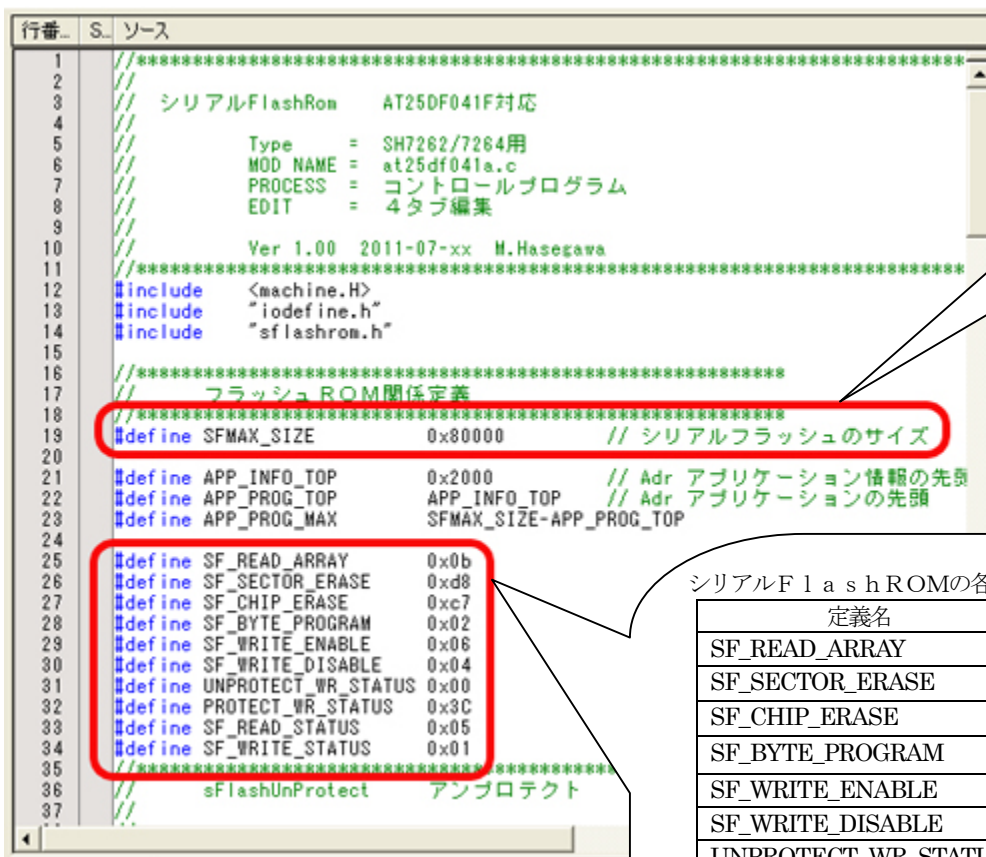
[3-1]



新規シリアルFlashROMに依存した定義およびコマンドプログラムファイル「sflashrom.c」を開きます。

1) 「sflashrom.c」に新規シリアルFlashROMに依存したコマンドを定義します。

[3-2]



「SFMAX_SIZE」に使用するシリアルFlashROMの最大サイズ (バイト) を定義します。

シリアルFlashROMの各コマンドを定義します。

定義名	コマンド	機能
SF_READ_ARRAY	0x0B	データの読み出し
SF_SECTOR_ERASE	0xD8	セクターイレーズ
SF_CHIP_ERASE	0xC7	チップイレーズ
SF_BYTE_PROGRAM	0x02	データの書き込み (バイト)
SF_WRITE_ENABLE	0x06	書き込み/イレーズ/ライトステータス許可
SF_WRITE_DISABLE	0x04	書き込み/イレーズ/ライトステータス禁止
UNPROTECT_WR_STATUS	0x00	ライトプロテクトの解除
PROTECT_WR_STATUS	0x3C	ライトプロテクトの設定
SF_READ_STATUS	0x05	ステータスレジスタの読み出し
SF_WRITE_STATUS	0x01	ステータスレジスタの書き込み

この例は、ATMEL社の「AT25DF041A」のコマンドです。コマンド仕様は各デバイスメーカーによって異なります。使用するデバイスのデータシートを参照して下さい。

2) 「sflashrom.c」に新規シリアルFlashROMに依存したコマンドプログラムを作成します。



下記の参考プログラム例は、ATMEL社の「AT25DF041A」用コマンドプログラムです。コマンドパラメータ仕様は各デバイスメーカーによって異なります。使用するデバイスのデータシートを参照してから作成して下さい。

[3-3]

```

35 //*****
36 //      sFlashUnProtect   アンプロテクト
37 //*****
38 //*****
39 void   sFlashUnProtect(void)
40 {
41     sFlashWriteStatus(UNPROTECT_WR_STATUS);
42 }
43 //*****
44 //      sFlashProtect    プロテクト
45 //*****
46 //*****
47 void   sFlashProtect(void)
48 {
49     sFlashWriteStatus(PROTECT_WR_STATUS);
50 }

```

関数「sFlashUnProtect(void)」は、デバイスのライトプロテクトを解除します。

関数「sFlashProtect(void)」は、デバイスをライトプロテクトします。

[3-4]

```

51 //*****
52 //      sFlashChipErase   チップイレーズ
53 //*****
54 //*****
55 void   sFlashChipErase(void)
56 {
57     Uchar cmd;
58     sFlashWriteEnable();
59     cmd = SF_CHIP_ERASE;
60     IoCmdExe(&cmd,1,0,0);
61     sFlashBusyWait();
62 }
63 //*****
64 //      sFlashSectorErase   セクターイレーズ
65 //*****
66 //*****
67 void   sFlashSectorErase(Ulong adr)
68 {
69     Uchar cmd[4];
70     sFlashWriteEnable();
71     cmd[0] = SF_SECTOR_ERASE;
72     cmd[1] = (Uchar)((adr >> 16) & 0xff);
73     cmd[2] = (Uchar)((adr >> 8) & 0xff);
74     cmd[3] = (Uchar)(adr & 0xff);
75     IoCmdExe(cmd,4,0,0);
76     sFlashBusyWait();
77 }
78 //*****
79 //*****
80 //*****
81 //*****
82 //*****
83 //*****
84 //*****

```

関数「sFlashChipErase(void)」は、デバイス全体をイレーズします。
[\[IoCmdExe0¥sh7264_rspi.c\]](#) RSPI0 コマンド (リードデータなしタイプ) 送信関数です。

関数「sFlashSectorErase(void)」は、セクター単位でイレーズします。
 <引数の仕様>
 Ulong adr; // イレーズするデバイスセクター内のアドレス
[\[IoCmdExe0¥sh7264_rspi.c\]](#) RSPI0 コマンド (リードデータなしタイプ) 送信関数です。

[3-5]

```

84 //*****
85 //      sFlashByteProgram   指定バイト数の書き込み
86 //*****
87 //*****
88 void   sFlashByteProgram(Ulong adr,Uchar *wdat,Ulong wsize)
89 {
90     Uchar cmd[4];
91     sFlashWriteEnable();
92     cmd[0] = SF_BYTE_PROGRAM;
93     cmd[1] = (Uchar)((adr >> 16) & 0xff);
94     cmd[2] = (Uchar)((adr >> 8) & 0xff);
95     cmd[3] = (Uchar)(adr & 0xff);
96     IoCmdExe(cmd,4,wdat,wsize);
97     sFlashBusyWait();
98 }
99 //*****
100 //*****
101 //*****
102 //*****
103 //      sFlashByteRead     指定バイト数の読み込み
104 //*****
105 //*****
106 void   sFlashByteRead(Ulong adr,Uchar *rdat,Ulong rsize)
107 {
108     Uchar cmd[5];
109     cmd[0] = SF_READ_ARRAY;
110     cmd[1] = (Uchar)((adr >> 16) & 0xff);
111     cmd[2] = (Uchar)((adr >> 8) & 0xff);
112     cmd[3] = (Uchar)(adr & 0xff);
113     cmd[4] = 0;
114     IoCmdExeRead(cmd,5,rdat,rsize);
115 }
116 //*****
117 //*****

```

関数「sFlashByteProgram(...)」は、バイト書き込みします。
 <引数の仕様>
 Ulong adr; // 書き込みするデバイス内の先頭アドレス
 Uchar *wdat; // 書き込みデータの先頭アドレス
 Ulong wsize; // 書き込みデータのサイズ (バイト)
[\[IoCmdExe0¥sh7264_rspi.c\]](#) RSPI0 コマンド (リードデータなしタイプ) 送信関数です。

関数「sFlashByteRead(...)」は、バイト読み出しします。
 <引数の仕様>
 Ulong adr; // 読み出しするデバイス内の先頭アドレス
 Uchar *rdat; // 読み出したデータを格納する先頭アドレス
 Ulong rsize; // 読み出しデータのサイズ (バイト)
[\[IoCmdExeRead0¥sh7264_rspi.c\]](#) RSPI0 コマンド (リードデータありタイプ) 送信関数です。

[3-6]

```
行番 S ソース
117 //*****
118 // sFlashWriteStatus sFlashROMステータスWrite
119 //
120 //*****
121 void sFlashWriteStatus(Uchar status)
122 {
123     Uchar cmd[2];
124     sFlashWriteEnable();
125     cmd[0] = SF_WRITE_STATUS;
126     cmd[1] = status;
127     IoCmdExe(cmd,2,0,0);
128     sFlashBusyWait();
129 }
130 //*****
131 // sFlashWriteEnable sFlashROMへの書き込み許可
132 //
133 //*****
134 void sFlashWriteEnable(void)
135 {
136     Uchar cmd;
137     cmd = SF_WRITE_ENABLE;
138     IoCmdExe(&cmd,1,0,0);
139 }
140 //*****
141 // sFlashWriteDisable sFlashROMへの書き込み禁止
142 //
143 //*****
144 void sFlashWriteDisable(void)
145 {
146     Uchar cmd;
147     cmd = SF_WRITE_DISABLE;
148     IoCmdExe(&cmd,1,0,0);
149 }
150 //*****
151 //*****
152 //*****
153 //*****
154 //*****
155 //*****
```

関数「sFlashWriteStatus(..)」は、シリアルFlashROMのステータスレジスタに書き込む内部関数です。

<引数の仕様>

Uchar status:// ステータスレジスタに書き込むデータ

[IoCmdExe()¥sh7264_rspi.c] RSPIO コマンド (リードデータなしタイプ) 送信関数です。

関数「sFlashWriteEnable(void)」は、シリアルFlashROMの書き込み/イレーズ/ステータスレジスタ書き込みを許可する内部関数です。

[IoCmdExe()¥sh7264_rspi.c] RSPIO コマンド (リードデータなしタイプ) 送信関数です。

関数「sFlashWriteDisable(void)」は、シリアルFlashROMの書き込み/イレーズ/ステータスレジスタ書き込みを禁止する内部関数です。

[IoCmdExe()¥sh7264_rspi.c] RSPIO コマンド (リードデータなしタイプ) 送信関数です。

[3-7]

```
行番 S ソース
155 //*****
156 // sFlashBusyWait sFlashROMがBusy中は待つ
157 //
158 //*****
159 void sFlashBusyWait(void)
160 {
161     while((sFlashReadStatus() & 0x01) != 0){} // 0==RDY 0!=
162 }
163 //*****
164 // sFlashReadStatus sFlashROMステータスRead
165 //
166 //*****
167 Uchar sFlashReadStatus(void)
168 {
169     Uchar buf;
170     Uchar cmd;
171     cmd = SF_READ_STATUS;
172     IoCmdExeRead(&cmd,1,&buf,1);
173     return(buf);
174 }
175 //*****
176 //*****
177 //*****
```

関数「sFlashBusyWait(void)」は、コマンド処理終了を待つ内部関数です。

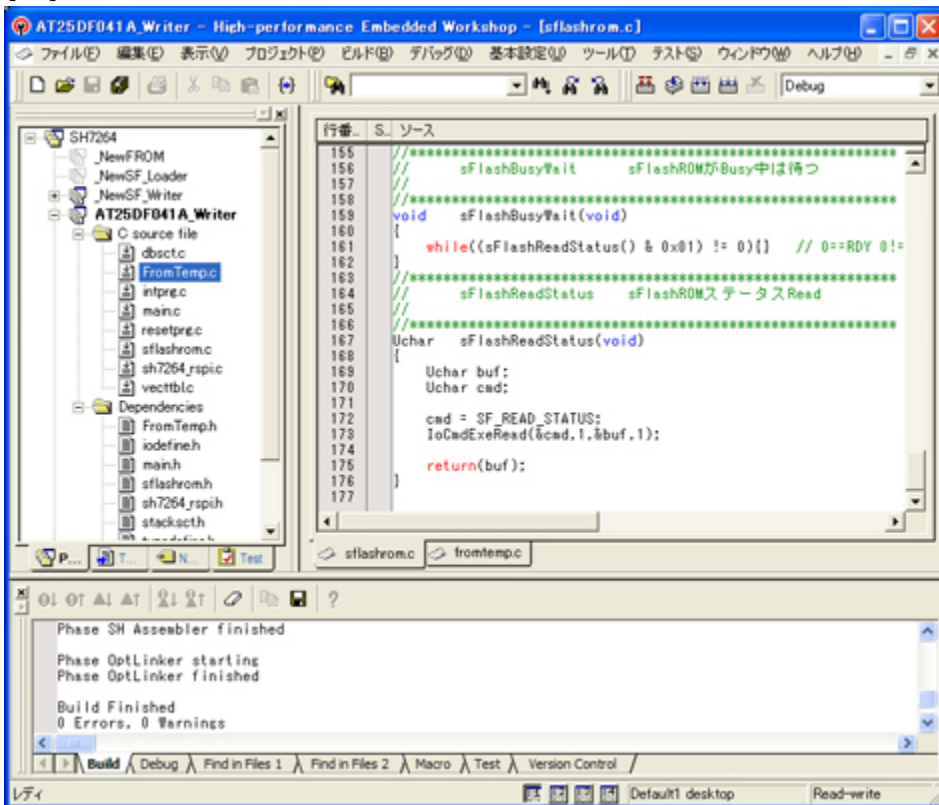
関数「sFlashReadStatus(..)」は、シリアルFlashROMのステータスレジスタを読み出す内部関数です。

[IoCmdExeRead()¥sh7264_rspi.c] RSPIO コマンド (リードデータありタイプ) 送信関数です。

以上で、関数の作成は終了です。

4. 新規シリアルFlashROMライタープログラムをビルドします。

[4-1]



He wメニュー<ビルド>-<すべてをビルド>で、「0 Errors 0 Warnings」になったことを確認します。

1) 新規シリアルFlashROMライタープログラム作成上のルール

[4-2]



<ルール1>

セクター情報定義のセクション名「SectTbl」の、ロケートは必ず、実行プログラムアドレス(TopAdr)の「+0x800」に割付けて下さい。

<ルール2>

セクション「SectTbl」のデータ配置にルールがあります。

```
const long SectorMax; // セクター数
```

```
const long SectorTopAdr[SectorMax+1]; // セクター毎 Top アドレス
```

この順番に配置されることが条件になります。

<ルール3>

最大セクター(ブロック)数は、「1024」です。

<ルール4>

スタックまで含めたオブジェクトサイズは「0x4000」16KB までです。

<ルール5>

```
#define OK 0 // 変更不可
```

```
#define NG 0xee // 変更不可
```

数値変更しないで下さい。

<ルール6>

下記4関数は、名称・引数・帰値等の仕様変更は不可です。

```
1) int FromOpen(void);
```

```
2) int FromClose(void);
```

```
3) int FromSectorEraseProc(char *cmd);
```

```
4) int FromWriteProc(char *cmd);
```

以上のルールは厳守して下さい。

【作成したシリアルFlashROMライタープログラムのデバッグ方法】

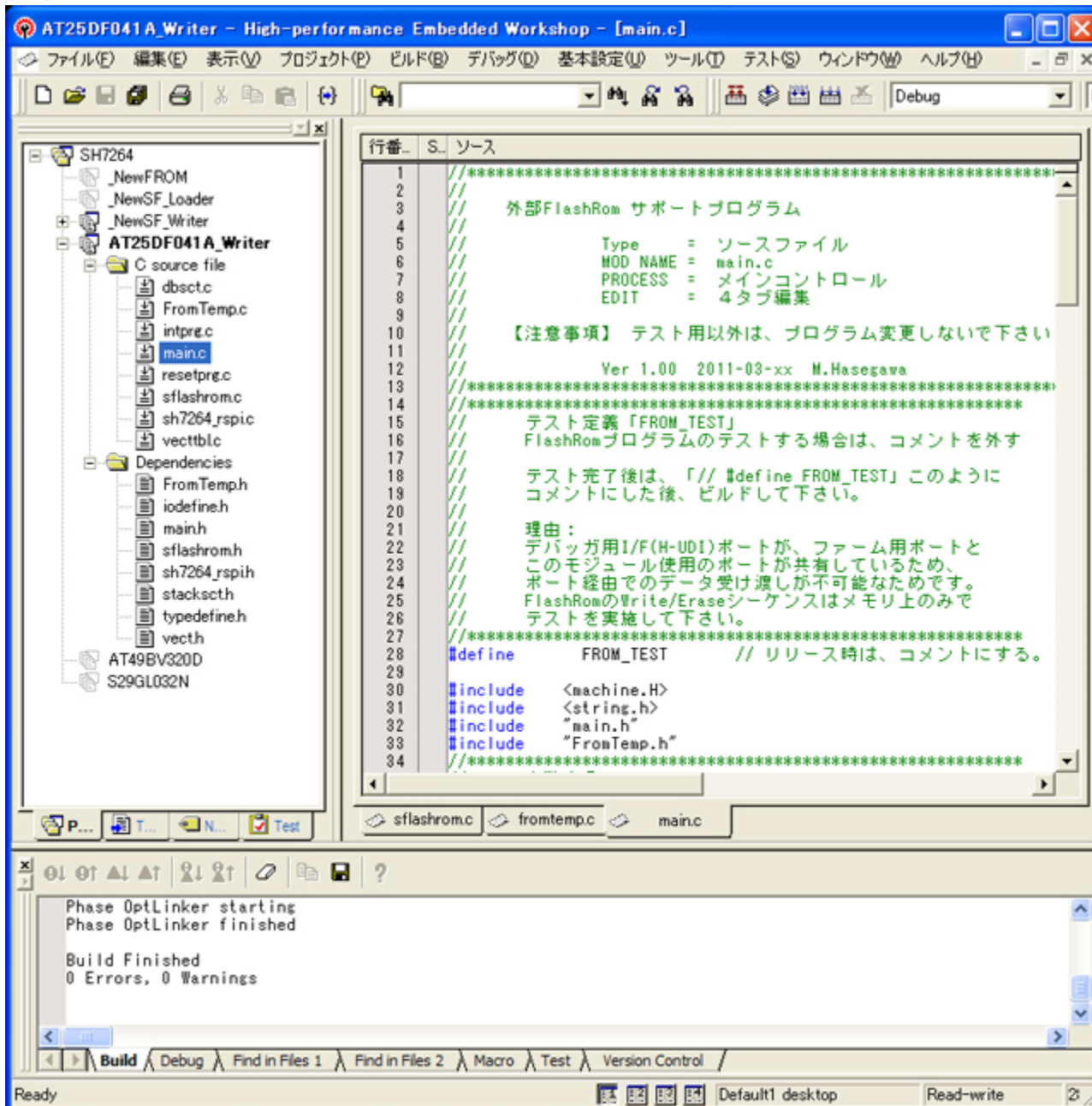
⚠ デバッグ中は、「ブートモード0」にするか、もしくは「ブートモード0」に出来ない回路構成（アドレス・データバスを汎用I/Oに使用）の場合は、プログラムの開始アドレスを「0xFFF8_2000」にロケートしなおしDEF設定も「0xFFF8_2000」に設定してデバッグして下さい。デバッグ終了後は「0xFFF8_000」に戻して下さい。

理由：

「ブートモード1・3」のままですとリセット解除後、ブートプログラムが起動され内蔵高速RAMの先頭から「0x2000」エリアにローダプログラムがロードされてしまいます。

1. Hewにてデバッグの準備をします。

[5-1]



- 1) モジュール「main.c」の「`#define FROM_TEST`」のコメントを外します。

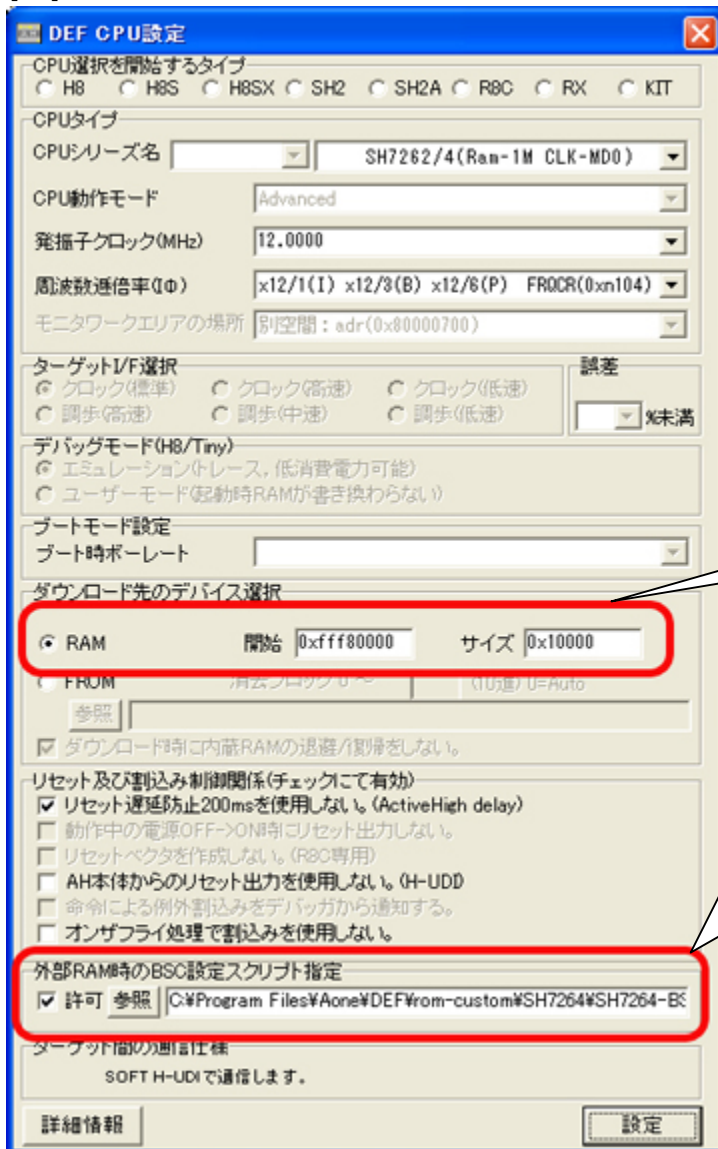
- 2) Hewメニューの「ビルド」->「ビルド」を指示します。

- 3) 「0 Errors 0 Warning」を確認します。

- 4) デバッガ使用の通信ポートと、このFlashROMプログラム使用の通信ポートと兼用させているため、通常のデバッグ操作でのデバッグは出来ません。よって、上記「`#define FROM_TEST`」のコメントを外すことにより、通信ポートを使用せず、内部メモリ操作のみで各関数のテストできるようにテスト用プログラムを用意しております。

2. デバッグ用コントロールソフト「DEF」にてデバッグする為の設定をします。

[5-2]



<CPU設定>

作成した「シリアルFlashROMライター」プログラムをターゲット側の内部RAMに転送して実行させますので、「RAM」にチェック後、先頭アドレスとサイズを指定します。

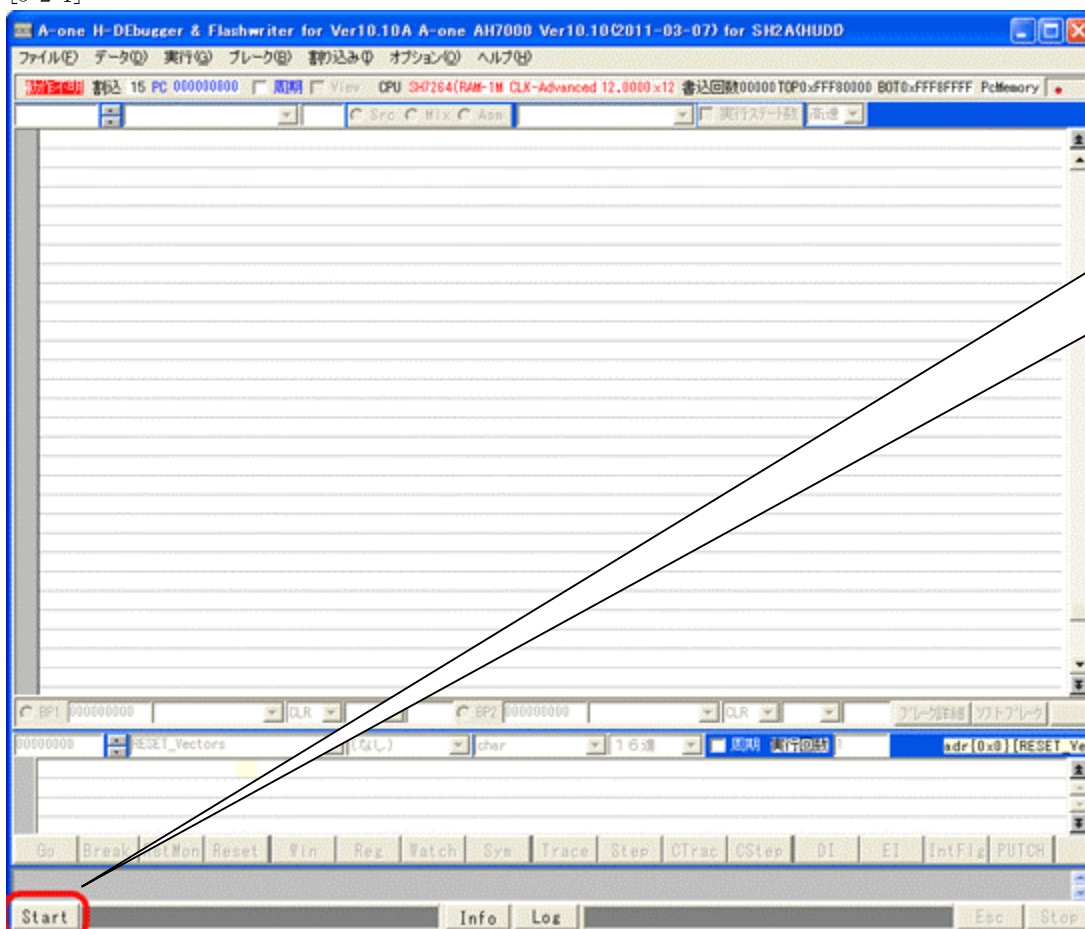
SH7264の場合
開始 0xffff80000 サイズ 0x10000
になります。

作成した「シリアルFlashROMライター」プログラムのデバッグにBSC設定が必要な場合は、スクリプトファイルを指定します。

SH7264の場合
インストールディレクトリ
"c:\Program Files\Aone\DEF\rom-custom\SH7264"
に、例として「SH7264-BSC-HSB.log」が用意してありますので、目的ハードにカスタマイズして下さい。

<- 「設定」をクリックします。

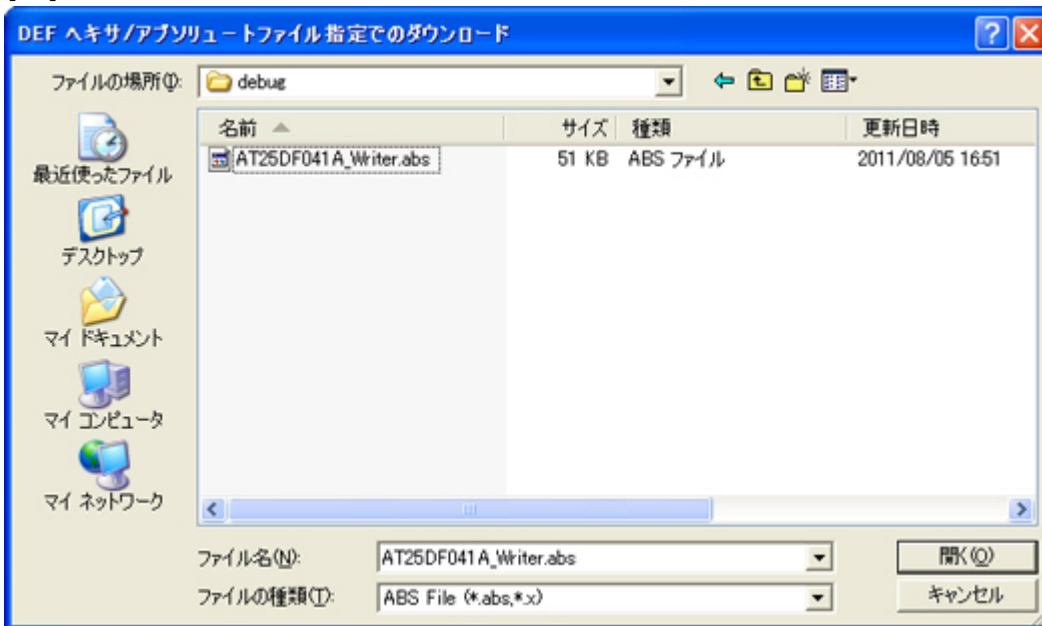
[5-2-1]



DEF画面、左下隅の「Start」をクリックします。

3. 作成したシリアルFlashROMライタソフトのデバッグを開始する準備をする。

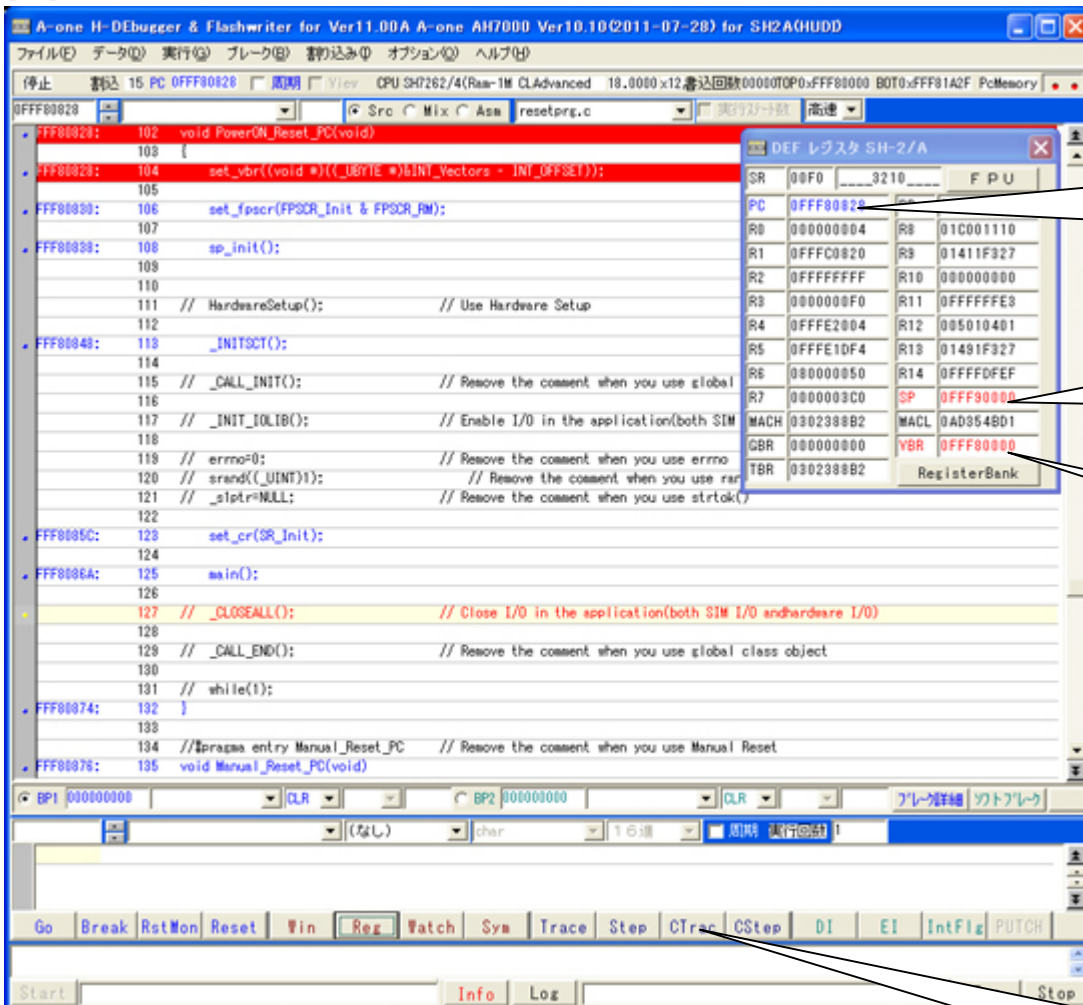
[5-3]



DEFメニュー
<ファイル>-<ダウンロード>
で、ダウンロードします。

インストールディレクトリ
"c:\Program Files\Aone\DEF\rom-custom\SH7264"
下の"\${ProjectName}\Debug"
に作成したアブソリュートファイルがありますので指定し
ます。
例) \${ProjectName}:AT25DF041A_Writer
[AT25DF041A_Writer.abs]

[5-4]



<ダウンロードが成功した初期画面>

PC レジスタ値が
「PowerON_Reset_PC()」関数の
先頭アドレスになっていることが
確認出来ます。

SP レジスタ値が内蔵 RAM のボト
ムアドレスになっていることが確
認できます。

VBR レジスタ値が内蔵 RAM のト
ップアドレスになっていることが確
認できます。

<操作>
「CStep/CTrac」ショート PB をクリックして、
関数「TestMain0」まで進めます。

[5-5]

関数「TestMain0」に進んでいるのを確認します。

<操作1>
このテストプログラムが動作中にエラー発生が終了したことを確認するため、このラインにブレークポイントを張っておきます。
[#74:main.c]

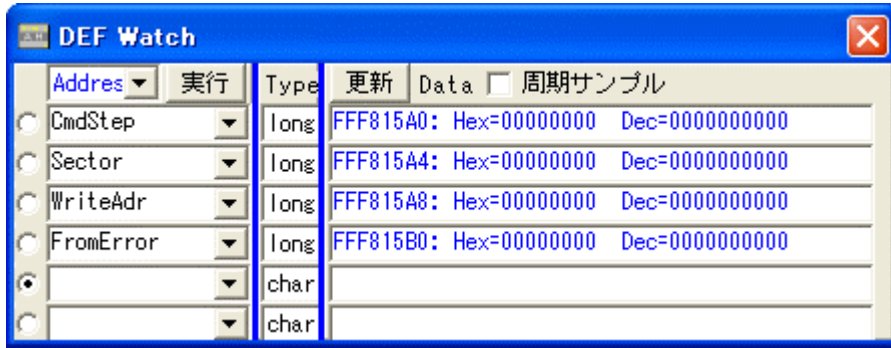
<操作2>
「CStep/CTrac」ショート PB をクリックして、関数「CmdWaitT0」まで進めます。

[5-6]

関数「CmdWaitT0」に進んでいるのを確認します。

<操作>
「Watch」ショート PB をクリックします。

[5-6-1]



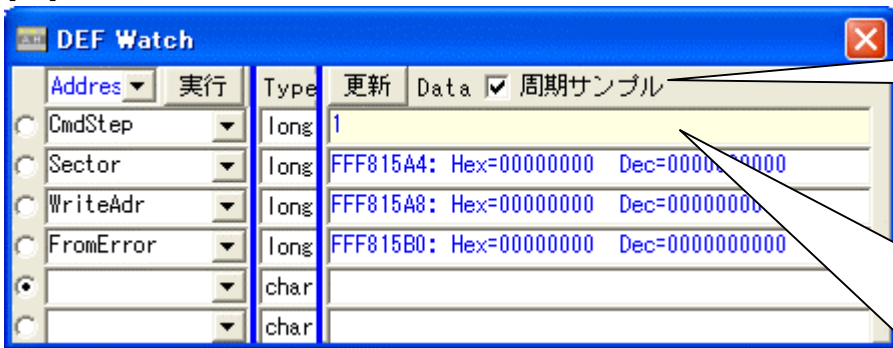
デバッグを進めるため、Watch 画面に変数を登録します。

- 1) CmdStep 関数「CmdWaitT」のコントロールステップ変数
- 2) Sector セクターイレースの進行カウンター
- 3) WriteAdr FROM 書き込み中アドレス
- 4) FromError エラー発生時情報

以上、4変数を登録します。

4. セクターイレーズ関数「FromSectorEraseProc(char *cmd)」をデバッグします。

[5-7]

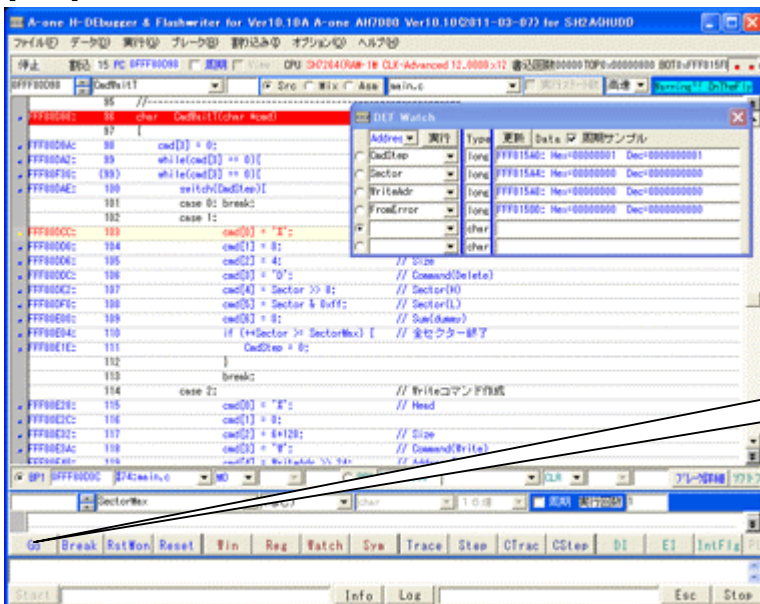


<操作1>
プログラム進行を確認するため、「周期サンプル」をチェックします。

<操作2>
変数「CmdStep」を数値「1」にします。
[Enter][1][Enter]で変更できます。

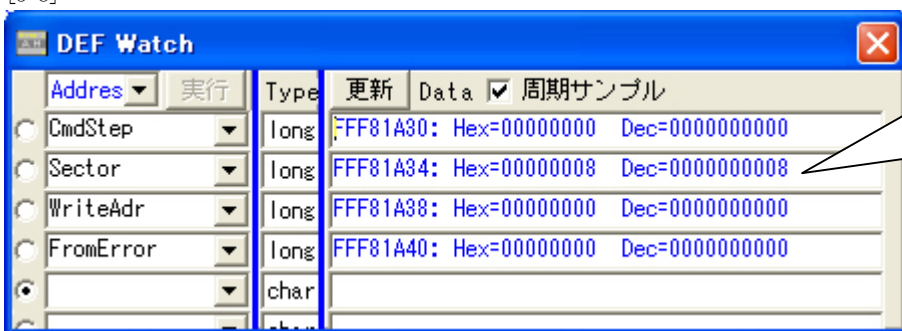
<備考>
関数「CmdWaitT」のソースを見てもらえれば理解できるかと思いますが、「CmdStep」を「1」にしますと、メモリー上でコマンドデータを作成して関数「FromSectorEraseProc(char *cmd)」に渡す仕組みになっています。
全て正常終了しますと、登録された全セクターをイレーズした後、変数「CmdStep」が数値「0」になります。

[5-7-1]



<操作3>
「Go」ショートPBをクリックします。

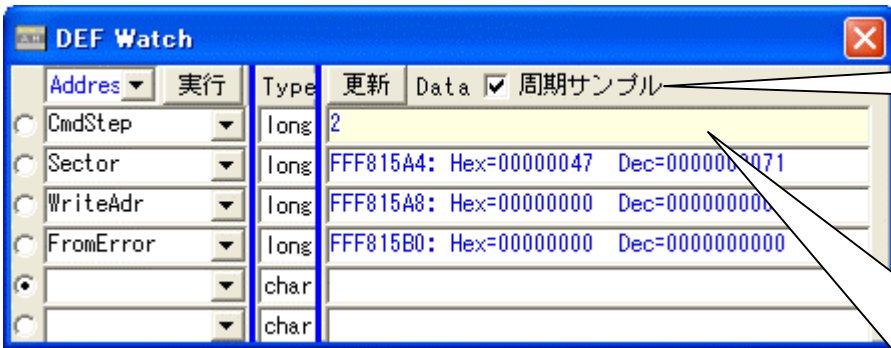
[5-8]



セクターイレーズが正常に動作していると、変数「Sector」が、ゼロ「0」から登録セクター数までインクリメントしていきます。
最終セクターまで正常終了しますと、変数「CmdStep」がゼロ「0」になります。
異常終了しますと、[3-5]で設定したブレークポイントで停止します。

5. 書き込み関数「FromWriteProc(char *cmd)」をデバッグします。

[5-10]



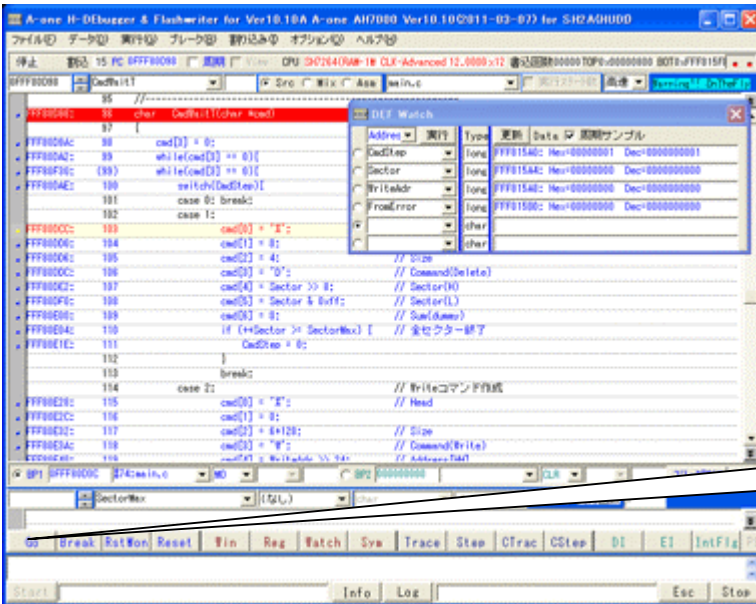
<操作1>
プログラム進行を確認するため、「周期サンプル」をチェックします。

<操作2>
変数「CmdStep」を数値「2」にします。
[Enter][2][Enter]で変更できます。

<備考>
関数「CmdWaitT」のソースを見てもらえれば理解できるかと思いますが、「CmdStep」を「2」にしますと、メモリー上でコマンドデータを作成して関数「FromWriteProc(char *cmd)」に渡す仕組みになっています。

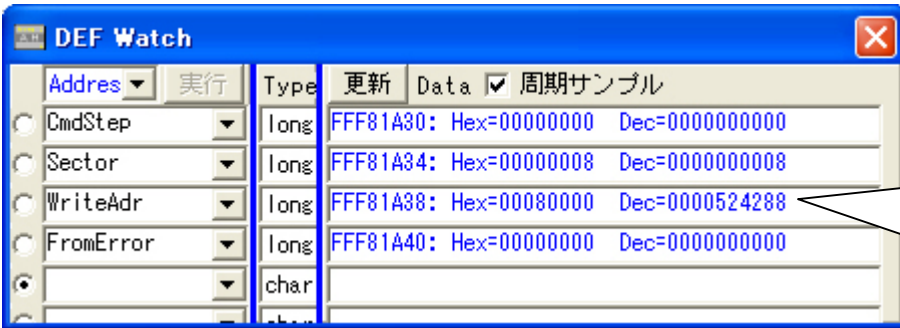
全て正常終了しますと、全エリア書き込み後、変数「CmdStep」が数値「0」になります。

[5-7-1]



<操作3>
「Go」ショートPBをクリックします。

[5-11]



書き込みが正常に動作していますと、変数「WriteAdr」が、ゼロ「0」から最終アドレスまで「0x80」ごとに加算していきます。最終アドレスまで正常終了しますと、変数「CmdStep」がゼロ「0」になります。

異常終了しますと、[3-5]で設定したブレークポイントで停止します。

5. その他関数「FromOpen(void)/FromClose(void)」が必要な場合は、必要に応じてデバッグして下さい。

1) 関数「FromOpen(void)」

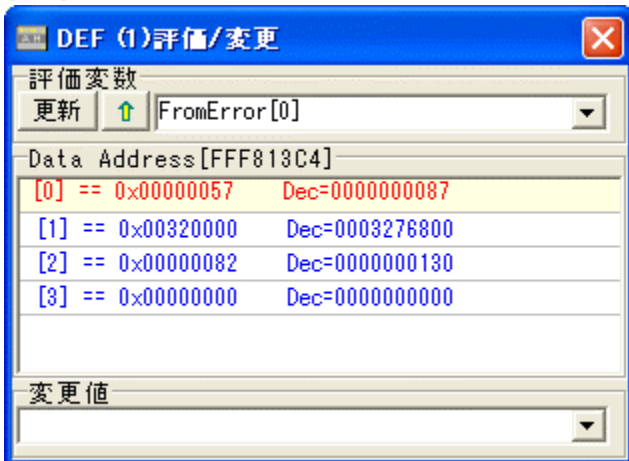
テスト用メイン関数「TestMain0」の60行でコール(Call)しています。

2) 関数「FromClose(void)」

テスト用関数「CmdWaitT(char *cmd)」で、コントロールステップ変数「CmdStep」を「3」以上の数値をセットしますとコール(Call)されます。

6. 異常終了時のエラー情報「long FromError[4)」の参照

[5-12]

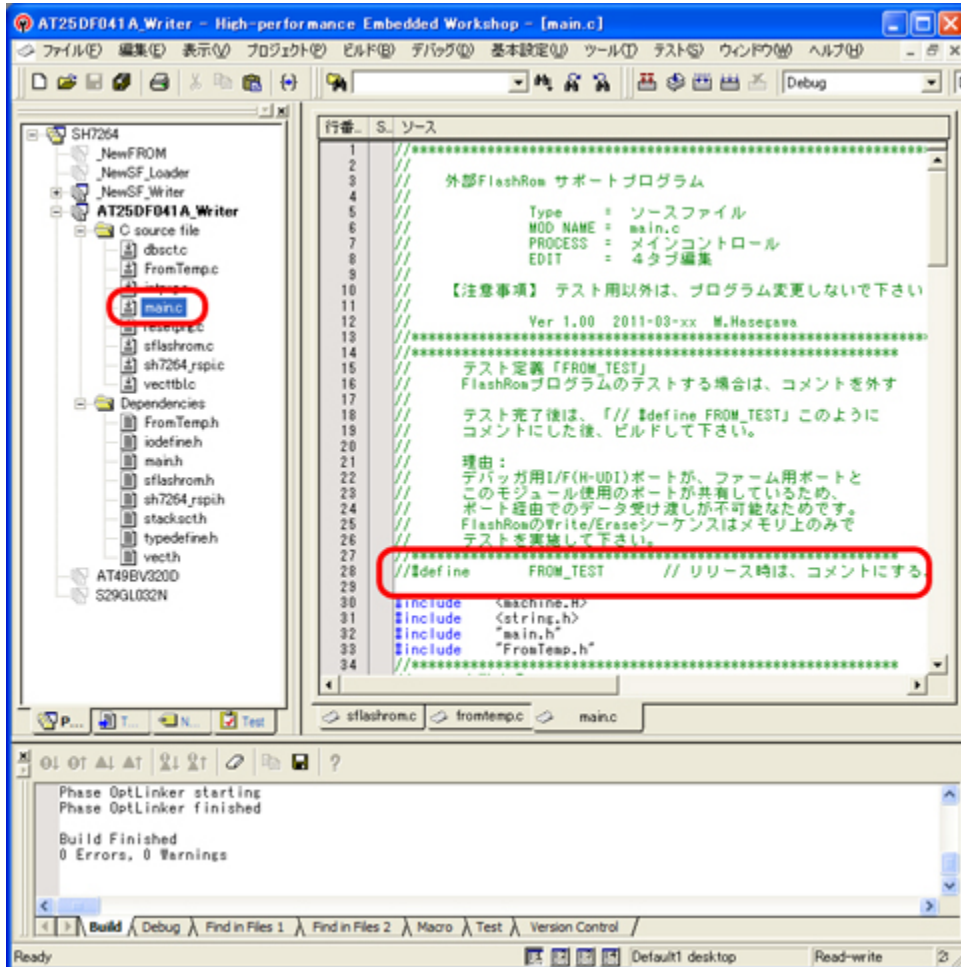


<評価・変更窓>

エラー発生にて異常終了した場合は、変数「FromError[4)」に情報が残りますので、プログラム修正の参考にして下さい。なお、この変数の仕様および名称等に規約はありませんので、自由に変更しても構いません。

【作成したシリアルFlashROMライタープログラムを正規リリース登録する】

1. シリアルFlashROMライタープログラムのデバッグが終了しましたら、Hewにて再コンパイルします。
[6-1]



- 1) モジュール「main.c」の「`// #define FROM_TEST`」をコメントします。
- 2) Hewメニューの<ビルド>-<ビルド>を指示します。
- 3) 「0 Errors 0 Warning」を確認します。



2. 御願ひ

本説の方法で、フラッシュROMライタープログラムを追加した場合、必ず、プロジェクトのバックアップすることを御願ひします。
今回は「c:\Program Files¥Aone¥DEF¥rom_custom」で作成する例で記述しましたが「¥rom_custom」をホルダごと別のディレクトリに貼り付けても作成できます。
つまり、ユーザーアプリのプロジェクトごとに管理するのも一案かもしれません。追加作成したプロジェクトは、ユーザー様の責任のもとで管理願ひます。

以上で、シリアルFlashROMライタープログラムの追加作業が終了です。